

大魔王 羽咲綾乃

深淵の英知

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

娘の綾乃に天賦の才を見出した羽咲有千夏は、娘に己の全てを注ぎ込む。それが破滅への序曲へなるとも知らずに。

※バドミントンにわか知識なのでそこら辺ご了承ください。

※短編から連載に変更しました。

※感想、高評価、誤字脱字報告ありがとうございます。いろいろ忙しい為なかなか返信はできませんが、励みになります。

目次

終わりの始まり	1
出会い	10
渴望	15
ママ似の女の子	22
羽咲綾乃	30
決意	36
孤独	47
置き去り	51
予感	59
期待	64

終わりの始まり

ラケットを持ち、構える。たったそれだけの所作だった。

その時、娘を見て私の中に天啓にも似た衝撃が走った。

何も教えていないのに、筋がいいとか、そんなレベルの話ではない。理に適った、既に完成されたその構え。

この娘は天才だと。

やはり、この娘は私の娘なのだ。

それは理屈では説明しきれない、天啓にも似た確信だった。

血が騒ぐのを感じた。この娘を鍛えたら一体どこまで伸びるのだろうか。歴史に名を刻むのだろうか。

人生の大半をバドミントンに生きた者としての本能を抑えることができなかつた。

だから私は鍛えた。娘を。

自分のこれまで生きてきたバドミントン人生のその知識を、能力を、技術を、その全てを娘に伝えた。

結果として娘は――

「——ゲ、ゲーム！ ウオンバイ、羽咲！ ○○ジュニアバドミントンクラブ！ 21
—0、21—0！」

静まり返った会場。半ば裏返った主審のコールだけが虚しく響き渡る。

コート上で膝を突き、茫然自失としている対戦相手を尻目に、娘は感情を宿さない冷たい目で対戦相手を一瞥すると静まり返ったコートを後にした。

その佇まいは圧倒的な強者そのもの。

だがその後ろ姿はどこまでも孤独なものだった。

バドミントンを始めた頃の娘は感情を常に爆発させていた。お遊びでやっていた私とのラリー合戦では楽しそうにラケットを振るい、娘のミスでラリーが中断すると悔しげに地団駄を踏み、もう一回！ もう一回！ と私に向かって言ってきた。ラリーの記録が更新された時はそれこそ太陽のような笑顔と共に嬉しさを爆発させていた。

娘が笑わなくなったのはいつからだろう。

初めての大会、緊張のあまり当日に体調を崩し、満足に実力を発揮できなかった時は悔し涙を流していた。

リベンジを誓った次の大会では万全の体制で試合に臨み、苦戦した試合はあったものの見事優勝をしてみせた。

その時の娘はこれまでにないくらいに感情を爆発させ、喜びを全身で表していた。大会が終わった後も部屋に飾られたトロフィーをいつまでも飽きることなく見つめ、ニマニマしていたのを覚えている。

その次の大会もー次の大会も娘は笑っていた。少なくとも私の記憶の中では笑っていた。

だが部屋の中の表彰状やトロフィーが増えていくに従って娘の顔からは笑顔が消えていった。

あれ程までに熱心に打ち込んでいた練習をサボるようになった。

かつて私は問い質したことが有る。なぜ練習をサボるのかと。一日休めばそれを取り戻すのに三日はかかる。才能溢れる娘の有限なその時間を無駄にしてほしくなかったから。

そうしたら娘はこう答えた。練習をしたら、強くなっちゃうでしょ、と。

「練習すればするだけバドミントンがつまらなくなるの」
私は言葉を失った。

強すぎるが故に、まともに打ち合える相手がない。続かないラリー。絶対的強者であるが故の孤独。

それはかつて私が現役時代の時にも抱いたことのある思いそのものだったからだ。

やはりこの娘は私の娘なのだと、そう思った。

それと同時に胸の内に沸き起ころのは猛烈な葛藤。

この娘はこんなところで止まってしまっていていい逸材ではない。

私の遺した記録を塗り替え、いずれはバドミントン界の歴史を塗り替え、歴代最強の選手になる女だ。

その才を潰すということは人類の損失。バドミントンに対する冒涇だ。

猛烈な危機感を抱いた私はひたすら考えた。

どうすればいい。娘をやる気にさせるにはどうすればいい。

様々な事を試みた。中国や欧州を始めとした海外遠征。現役時代のツテを使って、高校や大学の選手の練習に参加させてみたり、日本の最前線で活躍するプロの選手との試合を組んだことさえあった。

だが、そのどれもが無駄に終わった。

新たな環境に身をおかせても、自分よりも身体の出来上がった選手との試合を行っても、娘は負けなかった。

本来なら負けてもおかしくないはずの選手を相手にしても、娘は勝ち続けた。

そして勝ち続けられ続けるほど、娘の表情からは感情がなくなっていく、どんな相手を目の前にしても能面のような無表情を崩さないようになっていった。

どうすればいい。娘をやる気にさせるには、バドミントンに対する情熱を取り戻させるには、一体どうしたらいい。

娘を孤独から救うにはいったいどうすればいい——。

考えうる限りの方法を試した私は途方にくれていた。海外遠征もだめ。本来なら格上の相手であるはずのプロ選手を相手にしてもだめ。こんなの、いったいどうすればいいっていうの？

底の見えない娘に恐怖を抱いたことさえあった。それでも私は震える心を奮い立たせ、考えて考えて考え抜いた。

そして思い至る。

やるしかない。無いのなら、作るしかない。

娘を倒せる最強を、この手で作り出すしかない。

「相手のいないバドミントンはつまらない？」

「……」

大会で全戦全勝で優勝を飾り、閉会式の後。

つまらなそうにベンチに腰掛ける娘に聴いた質問に対して、娘は終始無言であったが、どこか不貞腐れたその表情は私の質問が正しいことを暗に示していた。

そんな娘の反応を見て、決心を固めた私は心の内で考えていた事を告げた。

「だったら私が用意してあげる」

「えっ」

娘が怪訝な顔を私に向けてくる。

「今から私が綾乃に並び立つ……いや、綾乃を超えるような逸材を探し出し、育てあげる」

その言葉をぼかんと、といった表情で聞いていた娘であったが、やがてその言葉の意味を理解したのかその表情を変える。

「わたしを超える？……そんな人、見つけられるの？」

見下すような下種でありながらも、どこか諦めたかのような笑み。 いるはずがない。それを確信しているかのような笑みだった。

事実、娘を超える逸材など、世界中どこを探してもいないだろう。

天賦の才を持つ親がその選手時代に培った技術を、経験を、余すことなく伝えたのはそれを凌駕する天賦の才を持つ我が子であり、その子は周りが自分について来られなくなるその時まで、気づけば敵と呼べるような好敵手がいなくなっていたその時まで、努力に努力を重ねた天才なのだから。

あなたを超える逸材はいない？ ああ、そんな事はあなたを鍛えた私が一番わかっている。

それでもこれ以上は娘を失望させる訳にはいかない。その一心で、焦燥を抱きつつ――それでもここまで娘を鍛え上げたコーチとしてそれを悟らせないように口を開く。

「世界は広い。あなたを超える逸材だって、世界中くまなく探せばどこかにいるはずだわ」

だから止まるな。こんなところで、止まらないでほしい。

「ぷっ……」

そんな私の心の内を見透かしたのか。娘はそんな私の言葉に吹き出すと、目を瞑った。

しばらく黙り込んでいた娘であったが、やがて気だるげに口を開いた。

「……いよいよ」

「えっ」

娘は私に顔を向ける。

「だからいいよって言ったの。私を超える人なんているはずもないってことはわかっているけど、今はママの口車に乗せられてあげる」

そう言うと、娘は私に背を向けると歩き出す。

「どこへ行くの?」

「練習。だってママが用意してくれるんでしょ? 私を楽しませてくれる相手を。だっ

たら練習しないと」

——楽しみに待つてるよー。

ひらひらと手を振った娘はそのまま振り返ることもなく、この場を立ち去っていった。

取り残された私はただ立ち尽くす。

「……」

これでいい。ひとまず。

その場しのぎの応急処置にしかならなかったかもしれないが、ひとまず、娘はまたバドミントンに対する情熱を取り戻してくれた。

なら、こうしてはいられない。

娘は努力すれば努力するだけ力を伸ばす、底の見えない怪物だ。

娘が立ち止まる理由が無くなった以上、ただでさえかけ離れた力の差はさらに隔絶したものとなっていく。

娘が信じてくれた想いには親として報いなければならぬ。

私は歩き出す。娘とは反対の方向に。

その先に待つ未来が、破壊であることを心の片隅で予感しながら。

そして私は出会う。異国の地デンマークで。

たまたま立ち寄った孤児院。たまたま広場で、一人、バドミントンで壁打ち練習をしているある子供を見て。

ああ、この子なら、娘を倒すことができるかもしれないと。

それはパンドラの箱に残された破滅の未来を覆せる最後の希望なのかもしれない。

その希望の名は――

出会い

孤児院の広場で一人、壁に向かってシャトルを打つ。

物心がついた頃から、あまり人付き合いが得意ではなかった私は、いつしか孤児院の片隅で埃を被っていたバドミントンセットを持ち出し、一人で遊ぶようになっていた。

別に寂しいとは思わなかった。壁に向かってシャトルを打つときに聞こえる風切り音。シャトルがまっすぐ壁に突き刺さるその瞬間。

地面に落ちたシャトルを拾い、また所定の位置に戻り、一連の動作を繰り返している。その間は何も考えずに済んだから。

晴れやかな心地いい日だった。その日も私は一人、壁にシャトルを打ち込み続けた。

何回打ったのか、数えてしまうのもやめてしまった中、何百回と繰り返した時と同じように落ちたシャトルを拾い、所定の位置に戻ろうと顔を上げたその時、いつの間にか一人の女性が立っている事に気がついた。

艶やかな黒髪を白い布で一括りにしている。

健康的な色白の肌。

身長は女性の割には高い部類に入るだろうか。

綺麗な人だった。

思わず息を呑んだ私はぎこちなくシャトルを拾うと所定の位置に戻ろうとする。こんな綺麗な人が、こんな孤児院の広場の片隅でなんの用があるんだろうと心の片隅で思っている。

「ねえ」

声をかけられたのはその時だった。

ビクウ！とわかりやすく身体をのけさせた私はギギギとぎこちなく首を女の人の方向へと回す。

「な……なんですか？」

緊張を隠せない私の姿がツボに入ったのか、女の人は軽く吹き出すと、改めて穏やかな顔を私に向けて言った。

「バドミントン、好きなの？」

そう聞かれて、私は即座に頷く事ができなかった。好きか嫌いか。そんなこと、考えたことがなかった。

ただ部屋の片隅で埃を被っていたバドミンントンのセット一式がたまたま目に入って。他にやりたいこともなく、一緒に遊ぶ友達もいなかったから、時間つぶしに遊んでい

ただだけだ。

黙り込む私を見て、女の人はクスリと笑みを浮かべると、近くに立てかけてあったもう片方のラケットを手に取った。

「……あまり手入れはされてないわね。でもま、いっか」

張り巡らされたネットをしげしげと眺めて小さく呟くと、少し距離を開けてから私に向き直った。

「ラリー、やってみる？」

「えっ……」

私が答える前に、女の人は「それっ！」と声を上げるとラケットでシャトルを私に向かって打ち上げた。

「わわっ……」

咄嗟にラケットを構えた私は、反射的にシャトルを女の人に向かってぎこちなく打ち返す。女の人は余裕を持って打ち上げられたシャトルを追いかけると、再び私に向かって打ち返してくる。

「それっ」

「っ！」

それからしばらく、唐突に始まった私と女の人のラリーは続いた。

始めはぎこちなかった私の動きも、時間が立つに連れ、緊張が解れたのか、軽やかになつていくのを感じた。

今までは壁に向かつて打ち込んだら、そのシャトルが返ってくることはなかった。けれど今は。この瞬間は違う。

打ち込んだら返ってくる。一人ではない。孤独ではない。そんなちつぽけな事実が、今の私にはなぜか無性にうれしかった。

「へへ……」

けれどそんな幸せな時間もやがて終わりがやってくる。

「あっ！」

慣れないラリーの応酬に足がもつれたのか、バランスを崩した私のラケットが空を切る。

どたん、と地面にお尻をぶつける私を見て、焦ったのか女の人が慌てて私の元へ駆け寄ってくる。

「だ、大丈夫？」

「は……はい、大丈夫です」

「そう、よかった。立てる？」

差し伸べられた手を、おそろおそろ握ると、女の人は優しく笑みを浮かべた。

「結構、ラリー続いたわね。バドミントン、やってるの？」

「い、いえ」

私の返事に、女の人は驚いたように目を見開く。

「やってなかったの？ それでこんなにラリー続くなんで、凄いわね」

どう答えたものか、言葉に迷う私を見て、我に返った女の人が口を開く。

「ああ、ごめんなさい。自己紹介がまだだったわね」

そして穏やかでありながらもどこか底の知れない微笑みを浮かべてその名前を告げる。

「私は羽咲有千夏。——あなたのお名前は？」

「コ、コニーです。コニー・クリステンセン」

「コニー、ね。いい名前ね」

これが私と有千夏との出合いであり——

「ねえ、コニー。あなた、バドミントンは好き？」

先の見えなかった私の未来が切り開かれた瞬間だった。

渴望

お母さんが家を出ていった。

とは言っても別に捨てられた訳ではない。国際電話だから頻度は少ないけど、普通に電話もするし、週に一度はわたしに合わせたトレーニングメニューの書かれたメールだって届いてくる。

お母さんが出ていった理由。それはわたしに匹敵する才能の持ち主を発掘するため。そして、わたしと対等に戦いあえる選手を育成するためである。

………わたしと対等に戦いあえる？ そんな人、いるわけ無いじゃん。

お母さんの言葉を聞いた時、まずわたしの頭の中に最初に思い浮かんだのはそんな言葉だった。

お母さんが周りに敵無しで、力を持て余しているわたしのことを想って言ってくれているのはなんとなくわかっている。

だけどこの前、お母さんのツテで大人のプロ選手とも試合したのにさ、まるで相手にならなかったじゃん。日本の最前線で活躍してるプロだっていうから期待していたのにさ。

プロの選手というのはわたしにとって最後の防衛戦みたいな所があった。

だってプロっていったらその道の最上位にいる人の事をプロって言うでしょう？

プロの選手なら私を満たしてくれると思うていた。いや、満たしてくれないと困るって思っていた。

だって、その道の最上位であるプロの選手が相手にならなかつたらさ、満たされないこの渴きは誰が満たしてくれるっていうの？

だからそのプロの選手が相手にならなかつた時。拍子抜けするくらいあっけなく勝ってしまった時。

ああ、バドミントンって、つまらないなって。

そう思った。

だからお母さんがわたしを超える選手を見つけ育てて言われた時もお母さんには悪いけど、喜びと期待感というよりは、どうせ無理なんだろうなっていう諦めの思いの方が強かった。

だけどその時のお母さんの表情があまりに真剣でさ。わたしをここまで育ててくれたのはお母さんだったし、お母さんと一緒にやる練習は楽しかったし。

お母さんの言葉なら、最後にもう一度信じてもいいのかもしれないって、思った。だからわたしはお母さんの口車に乗ってあげる事にした。

たとえ心の奥底では無理だって思っている口には出さず、無理やり自分を奮い立たせるように歪な笑顔を浮かべながら。

わたしより、強い人が来るならその日のために練習しなくっちゃね、と。

なんの根拠もないそんな言葉だったけど、その言葉は久しぶりに渴ききったわたしの心を奮わせたような気がした。

それでもまあ、そんな言葉一つでうまく行くなら人生何も苦労しないわけで。

お母さんが家を出て行ったその後もわたしは一人、努力を怠ることなく練習を続けた訳だけど。

「……ねえ、今の球、そんなに難しい球だった？」

「えっ……」

わたしからしてみたら簡単に打ち返せるような球だった。それなのに見ているこちらが苛つくような素振りや空振ったチームメイトの不甲斐なさに思わずラリーの手を止めて告げる。

ネット越しに告げられたチームメイトの女は、汗だくになった顔を拭いながら、しどろもどろに言った。

「む、無理だよ。羽咲さんの球、速くってさ……」

その言葉にムカついたわたしはラケットを持っていない手で髪をかきむしる。

「ツチ……無理でもさあ、もう少し必死に追い縋ろうとか、そういう努力しないの？今の球だって、返そうと思えば返せたはずじゃん」

そうだよ。この女の実力くらい、とつくの昔に把握してる。だから、この女がギリギリ捕れるくらいの球をわざわざ力を加減して打ち込んでやってるのだ。

返せるはずなのに返さない。だからわたしはいらつくのだ。

チームメイトの女はそんなわたしに対して、情けない、媚びするような笑みを浮かべていった。

「そ……そんなの無理だよ。だ、だって羽咲さん、あの羽咲有千夏選手の娘でしょ？」

さ、最初から格が違うんだよ。羽咲さんに勝てる人なんて、いつ、いるはずがないんだよ」

「~~~~~」

ここまで貶されてこの女は自分が情けないとは思わないのだろうか。少しはわたしに歯向かってやろうとか、思わないのだろうか。

やるせない思いに言葉を無くしたわたしは、行き場のない思いに思わず床にラケットを叩きつけようとして——寸前の所で踏みとどまる。

どんな理由があるにせよ、バドミントン選手にとつて、ラケットとは命そのものだ。ガットの張り方ひとつ、グリップの巻き方ひとつでシャトルの飛び方も変わってくる。だからそれをぞんざいに扱うのは許されないとすることは、お母さんに口酸っぱく言われてきた。

だけどさ、そしたらこの思いはどうすればいいの？

この鬱屈とした思いは、貯めこむしかないの？ 我慢するしかないの？

これ以上この場にいたら、頭がおかしくなりそうだった。

だから私は最後に舌打ち一つすると、練習場をあとにしようとす。

その時、頭の中にフラッシュバックするのはお母さんの言葉。

わたしを満足させる相手を育てあげると、約束してくれた真剣なお母さんのまなざしだった。

「……くそが」

小さく毒ついた私は、冷たい目をチームメイトに向ける。びくつと、怯えたようにチームメイトの女は体を震わせる。そんな情けない姿がわたしの苛立ちを加速させる。

「ひっ……」

「……もう、いいよ。君じゃ、練習にならないから。だから別の人、連れてきてくれる？」

「は、はひっ！……ごめんなさいっ！」

逃げるようにその場を立ち去っていくチームメイトの背中を見送る。

「……」

ねえ、お母さん。

お母さんは、私を満足させてくれる相手を見つけてくれるんだよね。

だから今は、我慢するよ。我慢して、練習するよ。

だけどさ、人には我慢の限界つてもものが存在するんだよ。

だからあんまりにも見つけるのが遅いと、わたしもどうなっちゃうかわかんないよ。

お願いだから、ねえ、お母さん。

早くわたしを満足させてよ——。

ママ似の女の子

それから私は、羽咲有千夏と名乗った女の子に引き取られることになった。

引き取られてから気づいたのことが、この羽咲有千夏——私の新しいママは何でも元プロのバドミントン選手で、現役時代には女子のシングルス全日本総合優勝10連覇という偉業を成し遂げた、バドミントンの世界では知らない人がいないくらいの有名な人だった。

その情報を引き取られた後に知って、ああ、無知って恐ろしいって思った。

『バドミントンは、好き？』

そんなママの一言で、バドミントンが好きになって、バドミントンを本格的に始めて、バドミントンについて知れば知るほど、ママの成し遂げた事の凄さが分かるようになった。

それで私を引き取ったママはこんな凄い人なんだって思うと、なんだか誇らしかった。そんなママの娘になったんだ、ママの残した偉業に恥じない娘になりたいって、心の底から思った。

初めての大会は緊張しすぎて、うまく身体が動かなかった。まるで生まれたての小鹿のように膝が震えて、情けないほどだった。

それでもコーチ席に座るママを見れば、力強く頷き返してくれて、それだけで力が湧いてきた。

だけど、それだけで勝てるほど現実には甘くなくて、初めての大会では2回戦であっけなく敗退してしまった。

悔しさのあまり涙があふれた。そんな私をママは優しく抱きしめてくれて、耳元で「よく頑張ったね。まだあなたは始まったばかり。これから一緒に頑張っていこうね」と言ってくれた。そんなママのぬくもりを感じた私は周りの目を憚らずに声をあげて泣いた。

もっとうまくなりたい。もっともっと――。

ママとの練習は楽しかった。楽しいだけじゃない、頑張れば頑張るだけ、うまくなつていくのを感じた。

ママは、「ゴニーのセンスがいいからよ」というけど、きつとそうじゃない。ママだから、ママが教えてくれるからうまくなるんだ。

それから徐々に頭角を現していった私は大会でも結果を残せるようになっていった。初めて優勝のトロフィーを手にしたのはママと出会って、一年が過ぎた頃。

湧き上がる歓声と喝采。授与される賞状とトロフィー。

皆が私を見ている。皆が私に溢れんばかりの拍手を送っている。

あまり規模の大きくないあくまで国内レベルの大会ではあったけど、それが私が初めて手にした栄光だった。

練習をたくさんして、勝つことが、楽しいことを覚えた瞬間だった。

もつと勝ちたい。もつともつと——。

私はバドミントンにのめりこんでいった。ママもそんな私の想いに応えてくれるように色々なことを教えてくれて、元日本代表の選手としての顔の広さを生かして色々な人との試合を組んでくれた。

流石にプロ選手相手ではまだ全然相手にならなかったけど、それでも格上の選手との試合は得るものが多かったし、いつか絶対に勝つてやるというモチベーションの向上にも繋がった。

そんな大変だけど、充実した毎日を送っていたある日のことだった。

家でシャワーを浴びて、自分の部屋に向かっていた時のことだ。

廊下の途中にあるママの部屋の扉の隙間が空いていることに気が付いた。

濡れた髪を拭くのを中断して、薄く漏れた灯りに釣られるようにおそるおそる扉に近づく。

その向こうには椅子に座って、目の前の机に突っ伏した状態になっているママの姿があった。扉の隙間から漏れていた灯りは、机の上の点けっぱなしになっていたパソコン画面のものであった。

(まったく、ママったら電源つけっぱなしじゃん……)

とりあえず近くにあったタオルケットを手に取り、ママの傍に近寄っていく。よっぽど深く熟睡しているのか、私が近づいても起きる気配はない。

「……何も被ってなかったら風邪ひいちゃうよー」

小声で呟きながら、ママの背中にタオルケットをかけてあげる。

ついでに電気がもつたいたないので、パソコンの電源を切ろうと手を伸ばして、その画面に映っている映像を目にして止まった。

流れていたのはあるバドミントンの試合だった。肌色髪色からして中国人？

ジャパニーズ日本人？ 私とそう年齢の変わらない女子シングルの試合だった。

(へー……スカウティング研究でもやってたのかな)

机を見ると、突っ伏したママの下には広げられたノートや本が散乱している。ノートにはびっしりとバドミントンの戦略や考えが書き記されていた。

(うわ、凄いなー)

改めてママの凄さを再認識された私は再びパソコンの画面に視線を戻す。

そして――

「――えっ?」

固まった。

画面に顔を近づけて、食い入るように映像を見る。

なぜならそこにはママのトレードマークと同じように髪を後ろに結んだ、まるでママを二回りくらい幼くした一人の少女が映っていたからだ。

それだけでも十分驚きだったのに、さらに驚いたのはそんな少女が展開する試合内容。いや、果たしてそれは試合と呼べるものなのだろうか。

否、まるで試合になっていない。表示されたスコアは18―2――いま更新されて19―2。

汗だくになり、疲労困憊になっている対戦相手を余所に首を回しながら、息一つ乱さず構えるママ似の女の子。

対戦相手の渾身のスマッシュを物ともせず、簡単に打ち返すその姿はある種の異様な光景に思えるほど鉄壁だった。

幾度となく打ち返されるはスマッシュを打ちやすい絶好球。それはママ似の女の子がわざと打ちやすい球を返しているのはもはや明白だった。まるで、限界まで追い詰められた獲物をいたぶる肉食獣のように、悉くを打ち返し、相手をもてあそんでいた。

やがて対戦相手の女の子は、自身の流した汗に足を滑らせ、その場に派手に倒れこむ。それを尻目にママ似の女の子はシャトルを一際、高く打ち上げた。

そのシャトルはゆっくりと空を舞い、倒れ伏す対戦相手の頭上を飛び越え、バックバウンドリーラインギリギリ、あと少してアウトになってしまいうライン上の瀬戸際のところにほてん、と落ちた。

20—2。無情にも刻まれるスコア。ママ似の女の子はまるで疲労の見えない足取りで、所定の位置へ戻っていく。

けれど試合はいつまで経つても再開しなかった。床に四つん這いになった対戦相手の女の子が、そのまま動くことなく、細かく肩を動かし、息を整えていたからだ。いや、息を整えているというより、あの様子は——

結局その試合は相手選手の棄権ということで、決着がついた。

「……………う、うーん」

「……………っ！」

茫然自失としていた私はママの声に我に返る。

起こしてしまったかと、何の悪い事もしていないのに、慌ててその場を後にしようとする。

その時だった。

「あや……の……」

ママの寝言だった。

アヤノ……？ アヤノって誰？

だけどそれからママが起きることはなく、静かな寝息が聞こえてくるだけだった。

眠ってるママを起こすわけにもいかず、私は重い足取りで自分の部屋へと戻った。

ベッドに膝を抱えて座り、私は先ほどの試合を振り返る。

バドミントンってただ楽しくて、勝つと嬉しいものだと思っていた。

お互いが全力を出し合って、試合の後は互いの健闘を称えあつて。

それがバドミントンだと思っていた。

だけどさっきの試合。ううん、あれは試合じゃない。ただの一方的な蹂躪だった。

対戦相手は満身創痍で力尽きて。それを冷たく見下ろすママ似の女の子。

静まり返った試合会場でただ聞こえて来るのは、力尽きた対戦相手の、懸命にこらえ

ても抑えきれなかった嗚咽。

それはあまりに残酷な光景だった。

ねえ、ママ。

あの女の子はいつたい誰なの？

あの女の子はどうしてあんなことをしたの？

あの娘はなんで、あんなにママに似ていたの——？

その日、結局、私は眠りにつくことができなかった。

羽咲綾乃

「おはよう、コニー」

翌朝。

ママは普段となんら変わらない調子で、食卓に姿を現した。

あれから眠りにつくことができなかつた私は、重い瞼を懸命に持ち上げながらも、ママに挨拶を返す。

「お、おはよ、ママ」

ママは向かいの席に腰掛けると私と同じように食卓に置かれたシリアルに手を伸ばしながら、口を開いた。

「昨日の夜、タオルケットかけてくれたの、コニーよね？　ありがとう」

「う、うん……」

器にいれたシリアルに牛乳を注ぎ込むママを尻目に私は少し牛乳を吸って、ふやけ気味のシリアルを口に含む。

「……」

食卓に広がる沈黙。それには奇妙な緊張が含まれているような気がした。

昨日の夜のこと。聞きたい。

だけど、昨日の夜のあの事は、聞いてはならないような、聞いてしまったら今まで過ごしてきた日常が変わってしまうような、そんな言いようのない不安があった。

触れてはいけない、開けてはならないパンドラの箱を開けてしまうような、底知れぬ不安。

だけど、私は知りたい。知りたいのだ。

昨日の映像の女の子が誰なのか。どうして、ママに似ていたのか。

なんで、あんな試合展開をしていたのか。

そして、寝言で言っていた『アヤノ』っていったい誰なのか。

どうしても知りたかった。

だから私は口を開く。

「あの、さ、ママ」

「んー、なに？」

「昨日の夜、ママにタオルケットかけた時に、パソコンの電源がついていたのを見たんだけどさ」

「——!!」

——瞬間、部屋の空気が凍ったのが分かった。

器にスプーンを入れた状態で固まるママ。目がこれ以上無いほど見開かれ、動揺しているのが分かった。

けれどそれも一瞬の事で、すぐに普段通りの表情に戻ると、器に入ったシリアルをスプーンでかき混ぜ始めた。

「あ、あの……ママ……」

「ん？ ああ、パソコンの電源も付きっぱなしだったのね。昨日の夜はちよつと疲れが溜まつていてね、ちよつと記憶があやふやなのよ」

それで、それからどうかしたの？

一見、普段通りの穏やかな表情で私に続きを促してくるように見える。だけどその表情はどこか強張っていて、私はそんなママの表情が、今この瞬間、作り上げられた仮初めのものであるということを感じていた。

ママが、この話題を避けたがっているのは明白だ。けれど、ママは自分から明確に拒絶するのではなく、判断を私にゆだねた。

私が聞いてくるのであれば答える。けれど、今、ここで聞かないのであれば、答えない。ママの表情は暗にそのことを伝えていた。決めるのは、私だ。

「……」

私は俯いた。

おそらく、これが最後のチャンス。今、ここで昨日の夜のことを見て見ぬフリをすれば、少なくともしばらくは今まで通りの日常を過ごせるはずだ。

ただバドミントンが楽しくて。

試合に勝つことが嬉しくて。

尊敬するママと一緒に、過ごしていく、穏やかな日常を。

だけど私は見てしまった。知ってしまったのだ。

あのママに似た、絶対的な存在を。

類を見ないほど圧倒的で、これ以上ないくらい冷酷で、それなのに、残酷なまでに美しいあのバドミントンを――

知ってしまったから――

「……昨日の夜、パソコンの電源がついていて、それで、そこにバドミンントンの試合が流れていたの」

紡がれた私の言葉を聞いて、ママは目をつむった。意を決つしたような、何かを諦めたかのような、その表情。

けれど私ももう、止まらない。

「そこにさ、ママによく似た女の子が映っていたの」
凄いい実力だった。

あんなにまで美しい、綺麗なバドミントンは今まで見たことがなかった。ただあの女の子はとても冷たい目をしていた。

美しいのに、どこまでも暴力的だった。

そこにはもはや互いに互いを敬意を払い、高めあうバドミントンはなかった。それは残酷なまでに圧倒的な、絶対的強者が弱者を弄ぶ、蹂躪だった。

どうしようもなく、悲しくなった。

どうして、と疑問を抱いた。

あなたのバトミントンは狂おしいほどに美しいのに。

あなたの心はどうしてそんなにも、荒んでいるのか。

私は、どうしても、知りたい――。

「——あの女の子は、いったい、誰なの？」

私の問いに、目をつむっていたママはため息を一つ、吐いた。

そして、静寂。

カチカチと、時計の音だけが辺りに響き渡る。

「……あの娘の名前は羽咲綾乃。日本にいる私の実の娘で……そして、あなたと同じように非凡な才能を持った、バドミントンの選手よ」

そう言って、目を開いたママのその瞳の奥にはどこか暗い影が落ちていて、そのさらに向こう側には確かな憂いが込められていた。

決意

「はじめはね、私も綾乃にバドミントンの道を勧めようとは思っていなかったの」

全日本選手権10連覇という偉業を成し遂げ、世界大会でも数々の栄光を手にした日本バドミントン界の至宝——羽咲有千夏。

自分で言うのも何だとも思うけど、客観的に見て、そんな輝かしい経歴を持つ母親と同じ道に進ませるといふ事がどういふ意味を持つのか。

それがわからない訳では無かったし、娘の綾乃には自分の好きな道に進んでほしいという、母親としての思いもあった。

しかし、そんな思いと裏腹に綾乃はバドミントンに興味を抱いた。無理もなかった。親のしている事に興味を覚えない子供がいはいはすが無かったし、バドミントンをしていくかっこいい親の後ろ姿を見ていれば当然、憧れというものを抱くものだったからだ。

そして——

「ラケットを手を取った綾乃のその立ち姿を見て、私はわかってしまったの」
この娘は天才だと。

鍛えればどれだけ強くなるのだろうか。偉大な記録を生み出して行くのだろうか、と。

「ただラケットを持つ娘の姿を一目見ただけなのに、おかしな話よね」

私は額に手を当て、自虐的に笑みを浮かべる。

「そして、それが全ての始まりだった」

娘の進む道は娘自身が決めればいい。そう思っていたはずの親心はどうにどこかへと消え去っていた。

この娘を鍛えたい。

そしてその先に待つ完成した姿を見てみたい。

その欲求が心の内で抑えきれなくなった。

「だから私は娘を鍛えたの。己の欲求のままに。未来の事なんて、考えもせずに」

私の思ったとおり、娘は教えたことをまるでスポンジのように吸収していった。その成長速度は同世代の子の比ではなく、半年が過ぎる頃には大会で決勝に進むまでに成長し、一年が経つ頃には大会で優勝する事が当たり前になった。

——お母さん、見て！また優勝したよ！

賞状とトロフィーを片手に満面の笑みで駆け寄ってくる娘が、誇らしかった。

この天才の娘を育てているのは、自分なのだという事実が嬉しかった。

「でも、そんな生活は長くは続かなかった……」

人は適応していく生き物だ。

同じ状態がずっと続いていくと刺激がなくなる。慣れていってしまう。

娘もまた例外では無かった。

周囲との実力が開いていき、勝ち続けるうちに、娘は勝ち続けるという行為そのものに慣れてしまっていた。勝つことに対する喜びや情熱を抱けなくなってしまう。

それでも、それだけならまだ良かった。いつしか試合に勝った後、どこか乾いた笑みしか浮かばなくなっていた娘であったが、それでもまだその時は、娘はバドミントンに對する情熱自体は失っていなかったのだから。

忘れもしない。あの時の事を。

試合中であるのにもか関わらず、棒のように立ち尽くす相手を尻目に虚しく突き刺さる綾乃のスマッシュを。

『えっ……』

綾乃は棒立ちの対戦相手を戸惑った表情で見ている。今は試合中だというのに何を構えもせず突つ立っているのか、意味がわからなかったのだろう。

そして訳もわからず、そのままその対戦相手は試合を棄権した。俯いたまま微動だにしなくなった対戦相手は、コーチに肩を抱えられ、会場を後にした。

コートに残されたのはただ呆然と、人形のように立ち尽くす綾乃の姿。そう。綾乃は強すぎた。

そしてその強さは対戦相手の心をへし折ってしまったのだ。完膚なきまでに。

試合の帰り道。コンビニに立ち寄った私は肉まんを片手に娘の元へ向かっていた。いつも試合の後のご褒美に買っていた綾乃の好物だ。

綾乃は試合会場側の公園でこちらに背を向けた状態で一人立ち尽くしていた。その後ろ姿に私は声をかける。

『試合お疲れ、綾乃。肉まん、買ってきたよ』

普段ならその言葉に即座に飛びついてくるはずの綾乃であったが、その日は違った。

『ねえ、お母さん……』

綾乃はこちらを振り向く事なく口を開いた。その声はどこまでも固く、そして平坦なものだった。

『バドミントンってき、対戦相手がいないと成り立たないスポーツだよね』

唐突の問いかけに戸惑いながらも私は答える。

『え、ええ。そうね。でもそれは他のスポーツでも言えることなんじゃない?』

その言葉に娘もだよー、と肯定する。

『だったらさ、その対戦相手の心まで折っちゃったら、この先わたしはどうしたらいい

の？』

そう言つて、こちらに振り向いた綾乃は笑みを浮かべていた。光を失つたその黒い瞳に、大粒の涙を溜めて。

この時になつて、ようやく私は自分の犯した過ちに気がついたのだつた。

それから私は綾乃の孤独を埋めようと必死になつた。

バドミントンに対して無気力になつた娘にどうにかもう一度活力をあげたいと。

高校や大学の練習に混ぜてもらつたり、現役時代の伝手を使って、全日本のプロ選手と試合を組んだりもした。

だが、そのどれもが応急処置に過ぎなかつた。

綾乃は負けなかつた。

綾乃は勝ち続けた。

圧倒的な力で、勝ち続けた。

私が見出したその圧倒的な才は私自身でも手が負えないほどの成長を遂げていた――

それは私が望んだはずのことだった。圧倒的な才能を持つ自分の娘を思う存分に育て上げて、その先にある完成された天才の姿を見るのが私の願望のはずだった。

だがその先に待っていたのは何だ。

その圧倒的強さ故に孤独になった娘だけだった。

対戦相手がいなければバドミントンは成り立たない。そんな当たり前の事を私は忘れていたのだ。

ああ、私はいったい何ということをしてしまったのだろう。

私は後悔した。最強を見てみたい。そんな自分勝手な欲望が娘を孤独にしまったのだから。

謝って済む話ではない。

娘を救うにはどうすればいい。

作るしかない。

いないのなら、この手で。

娘を超える最強をこの手で作り出すしかない。

だから、私は娘に約束した。

あなたと対等に戦いあえる相手を、用意すると。

十十十

「それじゃあ、ママがあの時、孤児院を訪れたのは……」

「ええ、そうよ。あの時、私が孤児院を訪れたのは綾乃に負けない才能を持った逸材を見つけ出すため。そしてその子を育て上げて、娘の相手をしてもらうためよ」

軽蔑した？と自虐的な笑みをママは浮かべる。

「あんな顔して近づいて、本当は心の内側ではあなたのことを娘を満足させるための道具としてしか見てなかったのよ、私は」

だけど私はそんなママの言葉を否定する。

「そんなことない」

だってあの時、ママが私を見つけてくれたから今の私がここにいる。

ママが私を見つけてくれなかったら私は今も孤児院の広場の片隅で、一人で壁打ちをししていたらどうから。

バドミントンは好きか。

そう問うてくれたママがいてくれたから私は、独りぼっちだった私は自分の未来に希望が持てた。

「私の人生はあの日、ママに出会った、あの時から始まったの！」

「——!!」

私の言葉にママの目がこれ以上ないくらいに見開かれた。

揺れる瞳は戸惑いを隠しきれないようだった。

やがて、溢れ出したのは大粒の涙。

「あ、あれ……う……」

手のひらで涙を拭うけど、溢れる涙は止まらなかった。

私はそんなママの隣の席に移動すると、その華奢な手を握りしめる。

「たとえママが、私をアヤノを満足させる道具でしかないと思っていたとしても、私にとつてママはママなの」

私を見つけてくれてありがとう。

バドミントンが好きだっていうことを気づかせてくれて、ありがとう。

私の心にはママへの軽蔑の思いなんてなかった。

ママには感謝の思いしかなかった。

「うっ、うううっ……うぐう……」

嗚咽を漏らすママは私をそつと抱き寄せた。

「ごめん……なさい……」「ニー、ほんとうにごめんなさい……」

そんなママをあやすように背中をさすりながら私は優しく耳もとで呟く。

いいんだよ、ママ。——と。

それからしばらくしてようやく落ち着きを取り戻したママは恥ずかしかったのか、少し頬を赤らめたけどしつかりと私の目を見据えていった。

「あなたは道具なんかじゃない。娘の綾乃と同じくらい大切な、私の娘よ」

はじめは打算もあつたのかもしれない。それでも、あなたと一緒に過ごして、一緒に成長していく内が変わっていったのだと、そうママは告白してくれた。

嬉しかった。やっぱりママは私を大切に想っていてくれていたんだと、はつきりとわかったから。

だったらもう迷いはない。ママが私を愛してくれるのなら、私はママの思いに応えたい。

「決めたよ、ママ……」

私は決意する。

「私がアヤノを倒す。そして私がアヤノにまたバドミントンの楽しさを思い出させてあげる。アヤノは独りじゃないって、これ以上、バドミントンに絶望しなくてもいいんだってことをわからせてあげたい」

そして、ママが私の家族になってくれたように私もアヤノと家族になりたい。

家族になって、いろんな事をお話したい。バドミントンの事、ママの事、私の事。

何よりお姉ちゃん自身の事をたくさん、たくさん、お話ししたい。

そしてゆくゆくは三人で――

「三人で、暮らしたい。私と、お姉ちゃんと、ママの三人で」

そう言つて、ママに微笑みかけると、ママはまた涙ぐんでいた。

「ええ、そうね。そうよね……」

涙を拭つたママは、赤く充血しながらも力強い眼差しを私に向けた。

「言つておくけど、綾乃は強いわよ。それはもうめちやくちや。何せ対戦相手が試合中に絶望して棄権してしまうくらいにね」

どこか発破をかけるようなママの言葉に私は獰猛な笑みを浮かべる。

「それをこそ望むところ。だから、これからはもつとビシバシ、しごいてよね！」

「ええ！」

今日、この日、私は自分にお姉ちゃんがいることを知り。

そのお姉ちゃんはまだあまりに強すぎるが故に孤独で、今のバドミントンに絶望している事を知つた。

そんなお姉ちゃんを倒す事が、私自身の目標になった。

今はまだ遠いかもしれない。だけどいつか絶対、あなたの隣に並び立つから――あなたに勝つてみせるから――

「待っててね、お姉ちゃん」

それはまだ直接出会ったことのない、異国の地にいるお姉ちゃんに対する私の決意だった。

孤独

ふと自分が今、何をしているのかわからなくなる時がある。

どうしてわたしは、バドミントンをしているのだろう。

どうせ勝てない相手もないのに、どうしてこんなにも真面目に練習してるんだろう。

どうせ勝てるってわかってるのに、どうしてこんな毎回毎回、公式戦に出場してるんだろう。

つまらない。

だから、そんなバドミントンを少しでも楽しめるように、いつしかいろいろ自分に条件を付けて試合をするようになった。

たとえばスマッシュ系統の技禁止。レシーブやドロップ系統の技だけで試合する。

相手が先に15点、20点稼ぐまでは得点することを禁止して、得点のハンデを背負った状態で試合したこともあった。

わたしは、わたしなりにバドミントンを楽しもうとしていた。ただそれだけだった。

ある公式戦を終えたその帰り道のことだった。応援に来ていた幼馴染のエレナが、私に向かって言ってきた。

『綾乃……さっきの試合、なに?』

どこか表情を硬くしたエレナの、その問いかけの意味が理解できなかった。

何って、ただ試合に勝っただけじゃん。普通に試合してもつまらないから、ちよつと相手に得点のハンデをあげたってだけでさ。

『そんなこととして、相手の選手に失礼だつて思わないの?』

失礼? 失礼って何が?

そんなの相手が弱すぎるのが悪いじゃん。つまらないバドミントンを少しでも楽しもうと、自分なりに工夫してるだけじゃん。

謝ってほしいのはむしろこっちのほうだよ。

『……変わったね、綾乃』

なに、エレナはわたしが悪いっていうの?

『みんながみんな、綾乃みたいに才能があるわけじゃないんだよ』

わたしはそんな才能欲しいなんて願ったことなんて一度もない。こんなに退屈な思いうするんだつたら、いつそ才能なんていらぬい。

才能なんて、欲しくなかつた。

エレナになにがわかる。

凡人のエレナに……ただ応援してるだけのエレナになにがわかる。

『エレナに……エレナにわたしの気持ちなんてわからないよ!!』

感情の赴くままにそう叫んでしまった。

次の瞬間、右頬に走る鋭い痛み。我に振り返線をあげるとそこには右手を振り切った状態で、瞳にいつぱいの涙を貯めたエレナの姿があった。

『バカっ!!』

『あ……』

そう言つて、エレナは走り去ってしまった。

以来、エレナとは口を利いてない。

海外へ行つてしまったお母さんに代わり、試合に応援しに来てくれていたのに、それ以来、試合会場でエレナの姿を見ることはなくなった。

もともと他のバドミントン部員との接点も薄かったわたしは、今度こそ独りになった。

「は、は……」

なんで。

なんでこうなるの。

試合に勝ったのはわたしなのに。無様に負けたのは相手のほうなのに。
なのになんで、わたしが悪い感じになってるの？

どうしてわたしは、独りなの？

自分の心の片隅で、何かが軋む音が聞こえてくる。

このまま放置していたら、どうなるかはなんとなくわかる。
だけど大丈夫。わたしはまだ、大丈夫。

お母さんが言ったんだ。わたしと対等に戦いあえる強い相手を用意してくれるって。

その約束がある限り、わたしはまだ、頑張れる——。

置き去り

『マッチウオンバイ・羽咲。……22―20、22―20』

それは一見すると接戦の激闘を制したスコアに見えたかもしれない。しかし、それはあくまでもスコア上の話。実際の試合内容は違った。

私の幼馴染である羽咲綾乃は試合開始当初、所定の位置についてから、全くその場を動かなかつた。

無防備な綾乃のコートに突き刺さる相手のスマッシュを尻目にラケットを担ぎ、トンと軽く肩を叩く綾乃はスポーツ選手とは思えないくらい退屈そうに、ふてぶてしい態度を取っていた。そんな綾乃の様子を見て、ざわめく会場。相手の選手も戸惑いながらも、綾乃に遠慮せず得点を重ねていき、そんな異様な雰囲気のまま試合は進められた。

いったい、綾乃は何をしているのか、訳がわからず眉をひそめる。今まで何回も、都合が合えば綾乃の試合の応援をしにきていたが、圧倒的な点差——単純な実力差で圧勝

する試合は何回も見てきたけど、こんな展開は初めてだったから。

試合が動いたのは相手の得点が20点目を刻んだ時だった。これであと1点でゲームポイントになるその瞬間だった。

綾乃が動いた。今まで退屈そうに立っているだけだった綾乃が、唐突に。

『あつ……!?!』

不意を突かれ、反応に遅れた相手を余所に、綾乃は相手のスマッシュを難なく相手とは逆サイドの方へとレシーブした。

『サ、サービスオーバー、ワン・トゥエンティ』

静かに刻まれた一点。試合が始まって以来、今更な、綾乃の初得点だった。

それからはこれまでの試合展開が嘘であったかのように一方的な試合が展開された。

無慈悲なまでに正確なスマッシュ。相手の意識の逆を突くドロップ。コートの後方から前まで一瞬で詰め寄る圧倒的なフットワークから生み出される鉄壁のレシーブ。

あれほどまでに開いていた得点差は瞬く間に縮まっていき、20分もかからない内に綾乃の得点は相手の得点と並んだ。

そして――

『ファーストゲーム、ウオンバイ・羽咲。22-20』

最初の試合を制したのは綾乃だった。それは圧倒的な点差からの劇的な逆転勝利だった。

異様な静けさから一転、沸き起こる歓声。『す……すげえ』とか『マジかよ』といった声が聞こえてくる。

そんな中、綾乃はゾツとするくらい冷たい目をしていた。

観客席のこちらからは聞こえなかったが、ネット越しに呆然と立ち尽くしている対戦相手に何かを呟く。

綾乃の言葉を耳にした対戦相手の顔がこれ以上ないくらい歪められ、歯を食い縛る様子からすると、何か気分よくなるような事を口にしたのではないということとは明らかだった。

二試合目。相手は最初から凄まじい集中を見せていた。今度は同じ轍は踏まないと言わんばかりに。

そんな相手を余所に綾乃はまた所定の位置からラケットも構えず動こうとはしなかったが、その態度の悪さを見かねたのか、主審から綾乃は注意を受けた。

『……ちっ』

ぎろり、とそんな主審を睨み返した綾乃であったが、言われた通りにラケットを構え

る。しかしやる気がないのは明白だった。事実、綾乃は軽くラリーを返すようにはなつたが、自ら攻めるような真似をせず、相手に得点をわざと取らせていた。

そして相手が20得点。あと1点取れば勝ちというところで、動き出す。

先ほど、馬鹿にされたのであろう相手も歯を食い縛つて、綾乃の反撃に抗おうとするが、無情にも点は取られていく。

それは見ているだけで辛くなるような、虐殺劇。

今までの綾乃はこんなことはしなかった。どんな相手でも全力で。圧倒的な実力差で歴然とした得点差になることはあつても、こんな相手を弄ぶような事はしなかった。

——私がない間、綾乃のことをお願いできるかしら。

傍にいてくれるだけでいいの。

それは今は日本にはいない綾乃のお母さん——有千夏さんが日本を発つ前、私に言うてきた言葉だった。

綾乃は幼馴染で親友だ。そんな事は頼まれるまでもないことだったし、だから私は躊躇することなく有千夏さんの言葉に頷いた。

幼いころからずっと一緒に。有千夏さんと楽しそうにバドミントンの練習をしていた綾乃の姿をずっと見てきたから。だから、有千夏さんがいない間は私が綾乃の力になれればと、そう思っていた。

だから所属しているバスケット部の合間を縫って、綾乃の練習に付き合ったり、対戦相手のビデオを撮ったり、家でのストレッチはいつも私がやっていた。

だけど。

歪な笑みを浮かべて、相手を蹂躪する綾乃の姿を見て、私は綾乃の事がわからなくなつた。

どうしてわざわざそんな相手に得点をあげるようなことをして、相手を煽るようなことをするのか。

今の綾乃は誰よりも強いのに、どうしてそんなつまらなそうなのか。
どうして、そんなに冷たい目をするのか。

わからない。

私には。

綾乃みたいに才能のない凡人の私には。

綾乃の考えていることが、わからない。

ただ一つ言えること。それはこのままではダメだということ。
相手を煽り、弄ぶような真似をして。

そんな事をしたら、周りには敵しかいなくなる。

対戦相手に恨まれ、避けられ、畏怖されて……。

(このままだと綾乃……独りぼっちになっちゃうよ……)

だからそんな幼馴染を止めないといけないと思っていた。

それが綾乃のためになると、そう信じていたから。

だけど、ああ、どうして——。

「なに、エレナもわたしが悪いっていうの？」

「ち、違う！ でもあんな事したら、綾乃は——」

「相手が弱いのが悪いんじゃない。全力を出したら簡単に倒せちゃうから。つまんない

バドミントンを少しでも楽しむ為にわたしなりに工夫してるだけじゃん」

どうして私の想いは伝わらないのか。

「……変わったね、綾乃。小さい頃の綾乃はそんな風じゃなかったよ」

ああ、違う。そんな事いいじゃない。

「皆が皆、綾乃みたいに才能があるわけじゃないんだよ。皆、才能が無くつてもバドミントンが好きで、必死に練習して、試合に勝とうと頑張ってるんだよ」

こんな、綾乃を責めるようなことを言いたいんじゃない。

綾乃はそんな私の言葉にシヨックを受けたのか、顔を歪める。

「わたしだってこんな才能が欲しいなんて、思ったことなんて一度もない！わたしが毎回どんな気持ちで試合してるか、エレナは考えたことあるの？歯ごたえない相手ばかりで、ちよつと本気出したらすぐにみんなやる気なくしちやつてさ、それであっけなく勝っちゃうのがどれだけ虚しいのか、エレナは考えたことがあるの!？」

興奮してるのか、綾乃は引き攣った笑みを浮かべながら、言葉を続ける。

「わからないよねえ、エレナにはさ。どうせバスケットでもベンチ要員の、凡人のエレナにはさー！」

その言葉に思わずカチンときて。

「エレナに、エレナにわたしの気持ちなんてわからないよ！」

「っ！」

ぱんっ。

気が付いた時にはもう遅かった。目の前には目を見開いて、赤く腫れた右頬を抑える綾乃の姿。

それでも綾乃の言葉に感情的になってしまっていた私は止まれなかった。

「バカっ！」

「あ……」

私は振り返る事もせず駆け出した。

有千夏さんとの約束も忘れて。

独りにしないと、誓ったはずの幼馴染を置き去りにして。

「は、は……」

腫れた頬を抑えて、一人、光を失った瞳から静かに涙を流している親友の姿に気づかずに。

予感

「マツチウオンバイ・クリステンセン。21115、16121、21118！」

それは私の優勝を告げる主審の宣言だった。

「っしー！」

思わずガッツポーズを握ってしまふ私。

そんな私を見て、長いため息を吐いた対戦相手の女性はやがてやれやれと言ったように苦笑いを浮かべた。

「まだ、チャンピオンの座を誰かに渡すつもりはなかったのだがな」

そう言つて、ネット越しに近づいて来た対戦相手——前年の王者である彼女は、負けながらも堂々とした立ち振る舞いで私に右手を伸ばした。

「いい勝負だった。お前になら負けて悔いはない、クリステンセン」

「は、はいっ！こちらこそありがとうございました！」

慌てて握手に応じると、彼女は汗だくの顔にフツ、とクールな笑みを浮かべた。

「王者なら、もっと堂々と振る舞え。なにせ、お前は今、この瞬間、このデンマークと

いう国の頂点に立ち、この国のバドミントンの象徴になったのだからな」

その言葉は目の前の彼女もまた王者であったからこそ説得力のある言葉だった。だから私は力強く頷いた。

「はー」

お姉ちゃんを倒す。そう決意したあの日からようやく、ようやく私はここまで来た。アマチュアではない厳しいプロの舞台に立ち、ヨーロッパの中でも最もバドミントンが盛んな国であるこのデンマークで、最も規模の大きい大会を勝ち上がり、その頂点に立つ。それがお姉ちゃんを倒す上で私が最初に立てていた目標であり、試練だった。

ここまで厳しい道のりだった。お姉ちゃんを倒すと決意したあの日から、ママの練習はこれまでとは比較にならないくらい厳しいものになったし、大会に出る過程で知り合う事になった私のもう一人の先生——国内唯一の金メダリストのヴィゴ・スピリッツ・キアケゴアの超スパルタ式の特訓には何度も倒れたし、吐いた。もう逃げ出したいと思った事も一度や二度ではないし、正直、バドミントンが辛くて辛くてたまらなくなつた時期もあつた。

それでも私が逃げ出さなかつたのは、歯を食いしばって耐えることができたのは、それでもやっぱりバドミントンが好きだったからという理由もあるけど、何より大きかつたのはあの日の決意があつたから。

相手がいなくて、バドミントンに絶望してるお姉ちゃんを救いたいという何よりも叶えたい願いがあつたからだ。

ようやくここまで来た。思わず感極まって泣きそうになるが、そんな涙はグツとこらえる。私はまだ何も成し遂げちゃいない。こんなんじやまだお姉ちゃんには届かないってわかつているから。

それでも今だけはこの死にもぐるいで勝ち取つたこの勝利を喜ばして欲しい。そんな思いで私は試合会場で待つているママの下へ駆け出した。

そして――

(あれ……?)

ママがいた。ベンチに腰掛けているママが。

私が優勝している姿を見ているはずだから、きっとママも喜んでくれているはずと思っていた。

でもベンチに座ってるママの姿はどこか気分が落ちて、項垂れているように見えた。

「ママ……?」

おそるおそる近づいて、呼びかけるとママが顔を上げた。そして私に気づくと、笑顔を浮かべた。

「ああ、コニー。試合見ていたわ。優勝、おめでとう」

「う、うん。ありがとう」

いつもと変わらないママのように見えるけど、さっきの項垂れていたママの姿を見ている私としては素直に喜ぶ事ができなかった。どうしてもさっきのママが気になってしまう。

「どうかしたの、ママ？」

「……」

私の問いかけにママはしばらく押し黙っていたけど、やがて静かに口を開いた。

「綾乃のことなんだけど……もう、あまり時間は残されていないのかもしれない」

「えっ……」

そうやってママは私にスマホの画面を見せてくる。

おそるおそる覗き込むとそこには。

全日本総合バドミントン選手権女子シングルス優勝——羽咲綾乃という文字が記されている。

決勝のスコア、21—0、21—0という冗談かと目を疑うような異常なスコアが記されていた。

「今、綾乃の幼馴染から連絡があったの。あの娘に酷い事を言っちゃって『もう私なんかじゃ、綾乃の力になることはできない』って。このままだと綾乃は壊れちゃうって」

「——!!」

ママの言葉に目を見開く。

ママがお姉ちゃんのお目付け役を幼馴染のエレナっていう女の子にお願していたことはこれまでの会話で聞いていた。最強故に孤独を歩むお姉ちゃんを独りにしないようにと。優しくて頼りになる、ママが信頼してる女の子だと聞いていた。

そんなお姉ちゃんの親友が匙を投げるほどに……ママに泣きつく程にお姉ちゃんは追い詰められているのか。変わり果ててしまっているのか。

進化しているのか——。

「……」

あまりに唐突な知らせに頭の中は未だ混乱している。もうあまり時間は残されていない……そんなママの言葉だけが何回も頭の中で繰り返し返される。

対峙しなければならぬ時がすぐ側に迫って来ている事を、今、私は予感していた。

期待

フラッシュの眩しさにわたしは顔をしかめる。

録音機を持った記者からは質問攻めの嵐。

曰く、史上最年少での全日本総合バドミントン選手権優勝について一言お願いします。

今、どんな気持ちですか？

この優勝の報告をまず最初に伝えたいのは誰ですか？

うるさい。

カメラのシャッター音も。記者からの質問も。

何もかもが、うるさかった。

一縷の望みをかけて、ジュニア選手権に続き、全日本選手権に参加してみたものの、暇潰しにもならなかった。

どいつもこいつも雑魚ばかり。日本のトップがコレとは聞いて呆れる。

幼馴染には見捨てられて。

気づいたら周りには誰もいなくなつてて。

それでも練習を続けて。

欲しくもない栄冠ばかりが積み重なつていく。

これ以上強くなることにいつたい何の意味があるんだろう。

「……」

今ここでこの思いをぶちまけたら少しは気が晴れるのだろうか。みんな弱すぎ。退屈しのぎにもならないって。

差し向けられたマイクの一つを見て、ぼんやりとそんなことを考えてみて、自虐的に笑う。流石にそんな事言ったらおしまいだね。

だから当たり障りのないことを適当に言つて、その場は乗り越えた。うまく笑えていたかどうかは不安だけど。

翌日の新聞には大きな見出しで歴史的快挙だとか、史上最年少優勝だとか派手な見出しで新聞の一面を飾つていた。写真には死んだ顔で表彰台に立つわたしの写真が使われていて、何もこんな写真使わなかつた方がいいのにと少し思つたりもした。

ワイドショーでも連日わたしの事が取り上げられていて、わたしと出会つたことなんて一度もない人たちがわたしの事を熱心に解説し、試合中のあの態度はいただけじゃないだとか、それでもその実力は本物だとか、無責任にもこれから先の大会でも期待ですな

んで、コメントを述べていた。

一部のネットでは試合中のわたしの態度や相手を叩き潰すその強さからか魔王だなんて、不名誉なあだ名がつけられてるみたいだった。

「……」

もう嫌だ。

もう嫌だよ。

小さい頃はあるなにも楽しかったバドミントンがどんどん辛くなっていく。

わたしだって、好きである試合をしているんじゃない。

誰かわたしとまともに戦つてよ。一方的な蹂躪じゃない、ちゃんとした試合をさせてよ。

わたしのスマツシユを打ち返してよ。

わたしのラリーについてきてよ。

わたしのレシーブを打ち抜いてみせてよ。

わたしを一人にしないでよ。

携帯が鳴ったのはその時だった。

差出人はお母さんだった。

メールに書かれていたのは『近々、日本に帰ります』という文字。

その言葉をしばらく呆然と眺めて、わたしはその意味を悟る。

「あはっ……」

そう。

いよいよなんだね。

お母さん、ちゃんと見つけてくれていたんだね。

「あはっ、あははははは……」

笑いが止まらない。今まで貯めてきた鬱屈した気持ち晴れていくようだった。

やっぱりお母さんは約束を守ってくれた。わたしが今まで一人でも頑張ってきたから、ご褒美をくれたんだ。

「ありがとう、お母さん」

携帯を胸に抱く。ああ、今から待ち遠しいよ。

いても立ってもいられなくなったわたしはジャージに着替えると家を出る。

「はっ、はっ、はっ、はっ」

ランニングして猛る気持ちを抑える。

こんなにもテンション上がったのは何時ぶりだろう。

小高い丘の上に辿り着いたわたしは一度止まり、空を見上げる。地平線の向こうに太陽が沈んでいく、美しい茜色の空を。

「……」

お母さんは約束を守ってくれた。

わたしと戦える人を連れて、日本に帰ってくる。

お母さんが見つけ出した人なんだからきつと、それはそれは強い人なんだろう。

だから期待が膨らんでいく一方で不安もある。

もしその人が拍子抜けするくらい弱かったらどうしよう？

もしそんな事になったら、わたしのこれまで頑張ってきたことは何だったんだろう？

でもここにきてそんな事は考えたくない。今はただ、純粹にバドミントンがしたい。

はやく戦いたい。

だから――

「期待はずれの子は、ヤだよ」

未だ異国の地にいるであろうお母さんの顔を空に思い描いたわたしは、そう言つて、
微笑んだ。